

キャリアデザイン学研究科

I 2018年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2018年度大学評価結果総評】(参考)

キャリアデザイン学研究科は2013年度に経営学研究科の一専攻から研究科となって以来、積極的に教育・研究内容を検証し、その充実を図っている点は評価できる。キャリアデザインにおける高度な専門教育の実現は、人文社会系の学問領域においては一つの範を示すものとして学内外での重要度は大きい。同研究科における質保証への意識は高く、教員同士の意見交換が活発に行われており、その甲斐あって学位授与率はほぼ100%、2年で学位を取得する率はほぼ90%であることは特筆に値する。また入学定員充足率が減少傾向にあることを踏まえ、学部との連携や海外展開をも視野に入れた新たな募集方法や募集経路を探るなど、実効性がある方策の検討が期待される。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2018年度に採用した新任教員を含め、大学院担当教員はキャリアデザイン学の分野において豊富な教育研究経験を有し専門性の高い研究者で構成しており、コースワークとしてのカリキュラムの充実化が実現されている。

修士論文指導は、前年度から引き続き、個別対応と教員間連携を重視した体制で行っている。担当教員による指導だけでなく、研究科の他教員からも修士論文構想発表会・修士論文中間発表会などにおいてフィードバックを受ける機会があり、担当教員による個別指導と、研究科全体での集団指導の両面において、院生の研究指導をきめ細かく丁寧に実施している。

学部との連携に関しては、2019年度にも学部・大学院執行部懇談会を複数回予定しており、学部教授会において毎回、大学院の動向を報告し、状況と課題を共有している。また、キャリアデザイン学部卒業生が就業経験を積んでからキャリアデザイン学研究科に入学するという2017年度のようなケースが今後いっそう増えていくことを期待している。

2019年4月の入学者数は定員と同じ20名であり、入学定員充足率100%を実現した。充足率安定化のため、入学者やシンポジウム参加者へのアンケート等に基づき、効果的な募集方法について分析していく。外国籍の応募者は毎年若干名であるが、現在のところ合格者は出ていない。従来から引き続き、性別・年齢・国籍を問わず、研究能力に基づいて入学者を選抜する方針であり、入学試験において外国人留学生を優遇する策を導入する予定はないが、全学的に活用できるサポート制度を含め、外国人留学生が研究しやすい環境の構築については検討を続けていく。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2019年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
①修士課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。	S A B
※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。 本研究科は①キャリア教育・発達プログラム、②ビジネスキャリアプログラムの2つのプログラムより編成され、各プログラムに対応するプログラム科目を設置している。また、コースワーク基礎科目、共通科目を設置し、そのうえでリサーチワークに対する個別指導(修士論文指導、演習)を行っている。教育課程を体系的に編成し、関心のある研究テーマを掘り下げることが可能となるように綿密に組み立てられている。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・キャリアデザイン学研究科カリキュラム	
②博士後期課程において授業科目を単位化し、修了要件としていますか。	はい いいえ
【根拠資料】※「はい」を選択した場合に単位化及び修了要件として設定されていることが確認できる資料を記入。 ・博士後期課程を設置していないため該当なし	
③博士後期課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。	S A B
※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。 博士後期課程を設置していないため該当なし	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

・特になし	
④専門分野の高度化に対応した教育内容を提供していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※学生に提供されている専門分野の高度化に対応した教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <p>【修士】 各期に実施している授業評価アンケートの結果は記述回答を含めて研究科教授会場で共有し、解決すべき課題を検討し、教育内容の改善につなげるというプロセスを毎年実行している。また、社会の潮流や研究の動向も踏まえ、授業内で用いるテキスト、輪読論文の変更、講義スライドの変更など、各教員が教育内容を刷新している。また、これらを実効性のあるものとして実現するために、各教員が最先端の研究を行い、教育研究能力の研鑽に努めるとともに、その成果を公表している。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・大学院シラバス ・法政大学学術研究データベース</p>	
⑤大学院教育のグローバル化推進のための取り組みをしていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※大学院教育のグローバル化推進のために行っている取り組みの概要を記入。</p> <p>【修士】 外国籍の応募者は毎年若干名であるが、現在のところ合格者は出ていない。従来から引き続き、性別・年齢・国籍を問わず、研究能力に基づいて入学者を選抜する方針であり、入学試験において外国人留学生を優遇する策を導入する予定はないが、全学的に活用できるサポート制度を含め、外国人留学生が研究しやすい環境の構築については検討を続けていく。 教育内容に関しては、教員による国際比較研究や海外と対象とした研究が進められており、それらの研究成果に依拠した、グローバルな観点およびグローバル社会に関する知見に基づく教育も行われている。グローバル化に対する大学院生の関心も高く、海外、グローバル化をテーマとした修士論文が年に2～3点出ている。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・キャリアデザイン学研究科 研究成果集 ・法政大学学術研究データベース</p>	
1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S A B
<p>※履修指導の体制および方法を記入。</p> <p>【修士】 入学直後のオリエンテーションの際、大学院要項、講義要項に基づいて、大学院での2年間の学習を展望した履修指導を行っている。シラバスに基づき、その場で全教員が授業概要を具体的に説明し、履修指導を適切に行っている。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・キャリアデザイン学研究科シラバス ・新生オリエンテーション資料</p>	
②研究科（専攻）として研究指導計画を書面で作成し、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい いいえ
<p>※ここでいう「研究指導計画」とは、事務手続きのスケジュールやシラバス等の個別教員の指導計画を指すのではなく、研究科としての研究指導体制及び研究指導スケジュールをまとめたものを指します（学位取得までのロードマップの明示等）。また、「あらかじめ学生が知ることの状態」とは、HPや要項への掲載、ガイダンスでの配布等が考えられます。</p> <p>【修士】 新生オリエンテーションにおいて研究指導計画を書面にて配付している。併せて、修士論文提出に至る流れを口頭でも説明している。さらに、2019年度より研究指導計画を大学院ウェブサイトにて公表する予定である。</p> <p>【根拠資料】 ※研究指導計画が掲載された文書・冊子等の名称を記入。 ・新生オリエンテーション資料 ・大学院ウェブサイト（2019年度中に掲載予定）</p>	
③研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導を行っていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい いいえ
<p>※組織的な研究指導、学位論文指導の概要を記入。</p> <p>【修士】</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

新入生オリエンテーションにおいて、研究指導計画を新入生に書面にて配付し、口頭にて学位取得に至る過程を詳細に説明している。また、年3回（修士1年の修論構想発表会：1回、修士2年の研究構想発表会・修論中間発表会：2回）の修論構想発表会・修論中間発表会を全教員、全学生参加のもとで開催している。この発表会を、キャリアデザイン学研究科における院生の研究に対する集団指導の場としている。その後、研究計画に基づき、担当教員が個別に指導を実施し、修士論文作成指導を丁寧に行っている。これらの各種行事は毎年行っているものであり、当初のスケジュールに沿って実施できている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・新入生オリエンテーション資料
- ・研究指導計画（2019年度中に大学院ウェブサイトに掲載予定）

1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。

S A B

※成績評価と単位認定の確認体制及び方法を記入。

【修士】

成績評価は各教員が責任をもち厳正に単位認定を行っている。論文審査については主査（1名）・副査（2名）が審査を担当し、口述試験後は審査結果を主査、副査で照合し、相互に率直な意見交換を行って厳正な最終評価を行い、可否を決定している。また、口述試験の際には、読み合わせにて教員間で学位基準の再確認を行い、適正な評価の実施に努めている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・キャリアデザイン学研究科 学位基準

②学位論文審査基準を明らかにし、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。

はい いいえ

※学位論文審査基準の名称及び明示方法を記入。

【修士】

新入生オリエンテーションにて、配付資料に掲載する形で学位基準を文書にて配付し、口頭にて説明している。また、今年度より大学院ウェブサイトにて学位基準を公表する予定である。

【根拠資料】※学位論文審査基準にあたる文書の名称を記入。また、冊子等に掲載し公表している場合にはその名称を記入。

- ・新入生オリエンテーション資料
- ・キャリアデザイン学研究科 学位基準（2019年度中に大学院ウェブサイトに掲載予定）

③学位授与状況（学位授与者数・学位授与率・学位取得までの年限等）を把握していますか。

はい いいえ

※箇条書きで記入※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。

- ・修士論文提出者に対する学位授与率はほぼ100%である。2018年度に長期履修制度を導入したことによって修了年限の管理が複雑化したことにより、大学院事務と連携して名簿管理等を行っていく予定である。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

特になし

④学位の水準を保つための取り組みを行っていますか。

S A B

※取り組み概要を記入。

【修士】

入学時の新入生ガイダンスにおいて、学位基準を周知徹底させ学習に取り組ませている。年3回の修士論文構想発表会・中間発表会の場において、厳しいフィードバックを行い研究科一丸となって、高い研究水準を維持する取り組みを実施している。また、修士論文審査は主査（1名）、副査（2名）に加えて他の教員も参画し、審査結果は教授会全体で承認するという手続きで行っている。以上の形で、論文審査における適正性の確保と、学位水準の維持を実現する体制を構築している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・新入生オリエンテーション資料

⑤学位授与に係る責任体制及び手続を明らかにし、適切な学位の授与が行われていますか。

S A B

※責任体制及び手続等の概要を記入。ただし、博士については、学位規則のとおりに行われている場合には概要の記入は不要とし、「学位規則のとおり」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>【修士】 原則として院生1名に対し1名の指導教員を配置し、指導教員の責任の下で論文感性似たるまでの指導を行っており、対応すべき問題の発生時には教授会の場で共有して対応をしている。また、学位授与基準に基づいた厳正な論文審査を行うことにより、学位水準を適正に維持する努力を常に行っている。修士論文審査は主査(1名)、副査(2名)に加えて他の教員も参画し、審査結果を教授会全体で承認するという手続きで行っている。このように、教授会全体として責任を負う体制のもとで論文指導および学位授与を進めており、この手続きは入学時のオリエンテーションおよび指導教員申請時のオリエンテーションにて、執行部から院生に対して説明している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・新入生オリエンテーション資料</p>	
⑥学生の就職・進学状況を研究科(専攻)単位で把握していますか。	はい <input checked="" type="checkbox"/> いいえ
<p>※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。 キャリアデザイン研究科の学生は、現職を有する社会人のみであるため、入学時に学生の勤務先を把握している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし</p>	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> B
<p>※取り組みの概要を記入。 【修士】 キャリアデザイン学研究科では、知識の吸収にとどまらず、講義や演習、修論構想発表会・修論中間発表会などの機会を通じて、学術論文のサーベイ能力、レポート能力、プレゼンテーション能力、論理的思考能力、問題解決能力など、より専門的なニーズに応えうる能力の開発に力点を置いている。そうした能力の応用的定着とその成果を把握するべく、講義や演習、修論構想発表会・修論中間発表会などを通じて、知識の吸収にとどまらず、多様な研究発表の機会を与えることで、研究の進捗、能力の向上を適宜、測定している。また、必要に応じて研究科教授会にて教育上の課題について議論している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・院生・修了生の学会発表、論文一覧</p>	
②具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> B
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。 【修士】 各授業内では個別の研究発表、討論、事例研究発表、課題提出などを実施し、学生に多様な研究発表の機会を与え、授業の理解度、その成果等を随時把握している。年3回の修論構想発表会・修論中間発表会においては、研究の進捗度や研究の深化レベル、研究の質を定期的に把握し指導を行っている。そのほか、修了生の学会発表、学会誌への論文投稿、出版物なども、大学院での学習、研究成果を測定するための1つの指標としている。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし</p>	
1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> B
<p>※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。 【修士】 研究科内に設置した質保証委員会や定例教授会において、随時、学習成果の検証とそのフィードバックについて意見交換や問題提起を行い、教育の改善・向上に向け、研究科の質保証を意識した取り組みを実施している。個々の授業や演習をはじめ、修論構想発表会・修論中間発表会などの機会において、院生の理解度、研究進捗度をはかり、絶えず教育内容、教育方法の刷新に努めている。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
・特になし	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※取り組みの概要を記入。 学生による授業改善アンケート結果を執行部にて検証し、その内容を教授会において全教員で共有し、各教員に結果をフィードバックしている。教育成果、教育内容・方法などの改善内容を教授会にて議論し、組織的に学生からの授業改善アンケート結果を有効に活用し、絶えず教育、指導の質的向上に努めている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
特になし	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・個々の教員による講義、演習に加え、修論構想発表会（2回）・修論中間発表会といった集団指導の機会が確保されていることで、学習成果の把握が促進され、それをもとに教育の改善・向上が行われていくというプロセスが長所・特色と言える。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

2 教員・教員組織

【2019年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	
①研究科（専攻）独自のFD活動は適切に行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
【FD活動を行なうための体制】 ※箇条書きで記入。 ・法政大学キャリアデザイン学会を独自に開催しており、広く学外にも公開しキャリア関連の研究者、実務家など先端的な研究業績を有する研究者等を講演者に招聘し、学会活動を積極的に推進している。教員、院生、修了生、学内外の人々などと相互の自己研鑽を積極的に促進している。 【2018年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】 ※箇条書きで記入。 ・法政大学キャリアデザイン学会研究会実績資料を参照	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
・法政大学キャリアデザイン学会活動実績資料	
②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※取り組みの概要を記入。 研究・社会貢献活動の活性化には時間の確保が必要条件との考えから、大学院執行部と学部執行部との連携により、教員への業務配分に関する検討を2019年度から開始する予定である。現状としては、研究活動のための学外活動は積極的に奨励しており、学事の運営に支障のない範囲で、各種委員会の代理出席等により、各教員の活発な活動が可能な環境づくりに努めている。 【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 大学院執行部と学部執行部との連携による検討を開始	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
・特になし	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・高度な専門性、豊富な研究業績を持つ研究者がバランスのとれた年齢構成のもと、カリキュラム	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

に適合的な教員組織を編成している。FD活動、研究活動においては、特に法政大学キャリアデザイン学会の取り組みが大きな意義を有している。また、日常の業務においても教員の資質の向上を可能とする環境の構築に努めている。	
---	--

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

III 2018年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
1	中期目標	プログラム制による体系的なカリキュラムを通じた専門性深化の継続と浸透。	
	年度目標	修士論文のさらなる質的向上をはかるため、基礎・共通科目、プログラム科目の教育をいっそう深化させ、組織的・体系的なコースワークの充実を図る。	
	達成指標	基礎科目、共通科目、プログラム科目（①キャリア教育・発達、②ビジネスキャリア）、演習科目という、プログラム制による体系的なカリキュラムを通じた専門性の深化を達成する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	キャリア調査研究法基礎（基礎科目）担当教員の人事が完了し、2018年度より専任教員が着任した。2017年度末で定年退職した教員の補充人事も行われ、キャリアカウンセリング論（共通科目）の専任教員が2018年度より採用された。このように、キャリアデザイン学の分野において豊富な教育研究経験を有し専門性の高い研究者が教授陣を構成することによって、コースワークとしてのカリキュラムは更に充実しつつあり、院生の学び・研究への影響としても、専門性深化を促進する効果が認められる
		改善策	—
		質保証委員会による点検・評価	
所見		本研究科では、キャリア調査研究法基礎（基礎科目）とキャリアカウンセリング論（共通科目）を担当する専任教員の採用が適切に行われた。それにより専門性の高い教授陣による組織的・体系的な教育がより充実化した。授業アンケートの回答データにも、授業内容への肯定的なコメントが多く寄せられている。また各回の講義テーマが明確に提示されていることを評価している回答もみられる。これらは、研究科のプログラムの体系的な教育の浸透による効果であるといえ、評価できる。	
改善のための提言	基礎科目と共通科目で、専門理解を深め、研究方法を習得している。各科目の内容は、シラバスに基づき計画的かつ体系的に専門性を深めていくことができる。ソフト面での充実化は整ってきている。授業アンケートの回答に受講者数に対して教室が狭いという意見も寄せられている。この点は、大学院事務と連携を図り、適切な教室規模で講義を実施していく。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
2	中期目標	研究科開設から5年という節目において、より一層の教育研究指導方法の向上を図る。	
	年度目標	年3回の修論発表会をさらに充実させ、論文の集団指導の場としても機能させ、教員・学生ともに相互啓発の場とする。	
	達成指標	院生の修士論文指導を個別指導、集団指導をさらに充実させ、深化させることにより、教育研究指導方法の向上を達成する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	修士論文指導は、担当教員による指導だけではなく、研究科の他教員からも修士論文構想発表会・修士論文中間発表会などにおいて、詳しくフィードバックを受ける機会があり、担当教員による個別指導と、研究科全体での集団指導の両面において、院生の研究指導を

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

			きめ細かく丁寧に実施している。2018年度から新たな専任教員が2名加わったことによつて、個別指導、集団指導の両面において、従来にもまして多角的な視野からのコメントを各院生は得ることができるようになり、指導がいつそう深化した。	
	改善策		—	
	質保証委員会による点検・評価			
	所見		年に3回実施している修士論文検討会では、研究科教員から各研究報告について、口頭でのリプライとフィードバックシートを用いた丁寧な指導が行われている。修士論文執筆には継続的な研究指導が不可欠であり、個人指導と集団指導の両面から実質的な指導が行われている点。また、専門分野の異なる教員からの多角的なコメントが、修士論文の独創性と質を担保している点。これらの点は、高く評価に値する。	
	改善のための提言		個別指導は今後も丁寧に継続していく。集団指導での各教員からのフィードバックも、修士論文を執筆するのに極めて高い効果をもたらしている。現状でも実施されているが、集団指導時の報告順を関連テーマごとに並べ、より専門的なアドバイスを総合的に深化させていくことができよう。集団指導では、報告者以外の院生も、報告内容と教員からのリプライを聞いている。学会での研究報告の形式を踏襲し、本研究科でも関連テーマごとに専門理解をより深めていくことができる。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】		
3	中期目標	修了生の学会発表、学会誌への投稿等の継続的促進を図る。 研究科修了生のレベルの維持・向上を図り、高度職業人養成機関としての本研究科の社会的地位の継続的な向上を図る。		
	年度目標	修了生の関連学会での研究発表、学会誌への論文投稿等の継続的促進を図る。本研究科に対する社会的認知を拡大させ、優秀な応募者をさらに増やし、質保証を重視しつつも研究科の定員充足を図る努力を継続する。		
	達成指標	修了生の研究論文を学会発表、学会誌への投稿などをさらに継続して促進し、キャリアデザイン学研究科の社会的認知をさらに向上させ、社会的地位を高める。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	大学院生の研究成果物や修士課程修了後の継続的研究活動、学会発表・学会誌への論文投稿などの具体的な成果は例年並みかそれ以上に積極的に達成されつつある。とりわけ社会人を対象に高度職業人を養成する研究科であることによつて、修了生の実社会における幅広いキャリア支援活動が展開されており、キャリアデザイン学研究科が掲げる理念・目的の社会的認知はいつそう向上してきている。	
		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	修士課程での学習成果は、修士論文にまとめられる。本研究科の修了生の中には、その後、修士論文をもとに学会発表や学会誌への投稿に向けて研究活動を継続しているものもみられる。高度職業人材を養成する機関として、修了生が継続的に研究活動を続け、学習成果を出していることについて多めに評価され、社会的認知の拡大にも効果がある。	
	改善のための提言	社会人院生が学ぶ本研究では、修士課程の1年目に必要関連単位を取得し、2年目に修士論文の執筆にあたっている。そのため、修士課程在籍中に、学会発表や論文発表という形で学習成果をあげることは難しい。在籍中に学習成果につながる土台を作り、研究科修了後に、それぞれ成果をあげている。こうした学習成果が今後も継続されるように現状の研究支援体制を維持していくことが望まれる。		
No	評価基準	学生の受け入れ		
4	中期目標	学生募集はホームページ、パンフレット、入学相談会、大学院シンポジウム、研究計画書説明会など、あらゆる機会を通して入学志願者に詳しい入試情報を提供してきており、このような取り組みをいつそう充実させる。		
	年度目標	定員の充足率に関しては、2013年から2018年までの6年間の平均が91.6%である。質を		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		厳しく担保しつつも定員充足率を適正に管理してきており、こうした充足率管理を継続していく。
	達成指標	入学者の選抜には全教員が携わり、志願者とその傾向や課題を全員で共有し、入学者選抜に関する検証をその都度行っている。こうした取り組みに基づき、2018年度までの高い水準の定員充足率の継続を達成する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	今年度の秋季入試では、志願者 10 名に対し、合格者を 7 名得た。続く春季入試においても、志願者 21 名に対し、合格者 13 名を得た。合計すると定員 20 名に対し、合格者 20 名であり、かつ、全教員が選抜審査に携わり、例年並みの審査基準で質を厳正に担保した上で、まだ合格辞退の可能性は残るものの、現時点で、2016 年度に獲得した定員充足率 100% を再び達成することができ、定員充足率適正管理という年度目標を十分達成することができた。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	二回の入試を実施し、定員を超える志願者の中から適正な選抜が行われている。選抜の結果、定員充足率 100% を達成したことは、高く評価できる。シンポジウムの実施や研究計画書説明会での丁寧な指導が志願者数の確保につながっている。また、本研究科の修了生から本研究プログラムの充実した内容を聞いて受験している者もいる。研究科での継続的な教育支援が、入試選抜にも効果をあげている。この点も評価できる。
改善のための提言	本研究科入学希望者に、研究科での教育支援や研究成果を伝えていく方法としてホームページにより詳細な内容を掲載していくこともできる。教員の取り組みが記事化されたコンテンツの URL をホームページとリンクしていくことで、大学院進学を希望する潜在的な入学希望者にも広くリーチしていくことができよう。	
No	評価基準	教員・教員組織
5	中期目標	当研究科では 2011 年に大学院担当教員の基準を明確化し規定を整備している。規定に基づき適切に教員募集・任免・昇格を行うことを継続していく。
	年度目標	法政大学キャリアデザイン学会を独自に開催しており、学会活動を積極的に推進することで、教員、院生、修了生、学内外の人々などと相互の自己研鑽を積極的に促進していく。法政大学キャリアデザイン学会を独自に開催しており、広く学外にも公開しキャリア関連の研究者、実務家など先端的な研究業績を有する研究者等を講演者に招聘し、学会活動を積極的に推進している。教員、院生、修了生、学内外の人々などと相互の自己研鑽を積極的に促進している。
	達成指標	当研究科の 2 つのプログラム、そしてそのベースにある基礎科目、共通科目を担当する教員は高い専門性を有した教育学、経営学、心理学、社会学等の教員である。当研究科のカリキュラムにふさわしい教員組織の維持継続を達成する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	基礎科目、共通科目、および 2 つのプログラムを担当する教員は、高い専門性を有する教員である。2018 年度より、キャリア調査研究法基礎担当の専任教員と、キャリアカウンセリング論担当の専任教員が採用された。教員補充を適切に行い、カリキュラムに適合的な教員組織を編成している。その上で、教員の FD、さらには教員、院生、修了生、学内外の人々の相互研鑽の場として、法政大学キャリアデザイン学会を金曜夜に年 6 回開催しており、毎回 40 名近くの参加があり盛会である。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	キャリアデザイン学に多角的にアプローチできる高い専門性を有する教員によって本研究科は構成されている。教員補充は適切に行われ、カリキュラムに適合した教員組織が編成

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

		<p>されている。教員編成は国内でも有数の研究機関であると言えよう。年に6回開催している法政大学キャリアデザイン学会では、本研究科の教員、修了生・研究生、学外参加者が集まり、40名から50名が参加している。国内のキャリアデザイン学の進展にも貢献している点は、高く評価できる。</p>	
	改善のための提言	<p>教員編成は適切に行われている。研究科の継続的な取り組みは教員間の日頃からの情報共有や専門知識のアップデートが欠かせない。研究会の場を活かすことや共同研究プロジェクトの実施を通じて、さらに充実したキャリアデザイン学の研究成果を生み出せるように今後も取り組んでいくことが望ましい。</p>	
No	評価基準	学生支援	
6	中期目標	<p>社会人院生が実務と研究のバランスをとっていく上でのアドバイスや、修士レベルの論文を書くのがはじめての院生に対する、学術的調査研究の取り組み方・心構えの指導など、全教員がいつそうきめ細やかな対応を行っていく。</p>	
	年度目標	<p>当研究科の応募者には留学生も存在するが、実際には入学に至っていない。このため、現状では修学支援は行っていないが、留学生の入学者が生まれる場合を想定して、留学生への修学支援を構想していく。</p>	
	達成指標	<p>近年、社会が激しく変動する中で、社会人院生のニーズはますます多様化・高度化してきており、これに対応するため、職業能力の開発にとどまらず、学び方・働き方・生き方を包含したキャリアデザインの構想を達成していく。</p>	
	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A
		理由	<p>留学生の入試志願者も存在するが、今年度入試においても、残念ながら入学合格基準を満たす質の高い留学生の応募者がいなかった。キャリアデザイン学研究科は、学生の質を重視し質保証の観点からも、現在留学生は存在しないが、今後、合格基準を満たす質の高い留学生の応募を期待し、入学チャンスを与え、グローバル化を積極的に推進したいと考えている。その一環として、今年度の教授会審議では、研究科共通科目「日本語論文作成A・B」について、入学した留学生が受講を希望した場合に、履修可とするという議論が行われ、さらに、日本語科目の単位を修了単位として認めるか否かについても、時間をかけて議論を展開してきた。将来的に留学生の入学があった際、これまで以上に院生のニーズが多様化・高度化することは想像に難くないため、これに対応できるよう、教員側もキャリアデザインの構想をより深掘りしている最中であり、同時に、従来通り、社会人院生への指導経験豊富な教授陣がきめ細やかな対応を行っている。</p>
		改善策	—
	年度末報告	質保証委員会による点検・評価	
		所見	<p>留学生は毎年、本研究科を受験している。高度養成人材を要請するための大学院として求める合格水準に達せず、留学生の入学は未だ見られない。この点は、適切な選考の結果でもあり、一切、問題はない。また、合格水準に達して入学する場合には、留学生の指導も問題なく行える。30代から60代後半までの男女が合格し、本研究科で学んでいる。多様性にも富み、教員はそれぞれの院生の問題関心に合わせて丁寧な教育支援を続けている。学生間でも日頃から相互コミュニケーションが図られ、学生支援の体制は整っている。一方で、学生支援とはいえ、本研究科で学ぶのは社会人院生である。社会人としての個々のニーズを把握しながら、細かな指導を行っている点は、高く評価できる。</p>
		改善のための提言	<p>本研究科の修了生と現役生との学びの機会として法政大学キャリアデザイン学会の場をさらに活かしていくことができる。学生支援で大切なことは、在籍時の研究指導を通じて、院生のキャリア形成をサポートしていくことである。長期履修制度も導入し、社会人院生のそれぞれのニーズにあわせた学生支援が可能となった。研究科全体としての学習効果を高めながら、今後も現状通り細やかな学生支援を続けていく。</p>
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
7	中期目標	キャリアデザイン学は理論に裏付けられた実学であり、高度な専門職を目指す院生の学習	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		ニーズに応えるのと同時に、社会の人材ニーズにも対応していくことに力を置く。
年度目標		研究成果の積極的な内外への発信をはじめ、教員・学生と、それを取り巻く社会との間に、有機的な相互関係を構築する。
達成指標		各種学会での活動をはじめ、理論的にも実践的にも、学外の社会組織との協働に力を置いた取り組みを行い、社会貢献・社会連携のいっそうの活発化を達成する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	キャリアデザイン学研究科の教員は、経営学、教育学、心理学、社会学などといった分野の各種学会での活動をはじめ、理論的にも実践的にも、学外の社会組織との協働に力を置いた取り組みを行っており、社会貢献や教育研究成果の社会還元にも積極的である。研究科としては、年に1度キャリアに関する議論をけん引するシンポジウムを開催している。また個々の教員も、厚生労働省、財務省、経済産業省、東京都、一般・公益社団法人等からの依頼を受け、その専門性を生かした審議会委員や専門委員、団体等の役員、研修講師などを務めている。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	本研究科の教員は、それぞれに各種の学会報告や論文発表・書籍刊行で研究成果を社会的に還元している。人生100年時代を迎えるにあたり、社会変化に対応し、自ら主体的に学び働き続ける上で、個々のキャリア形成を専門的に分析していく社会的ニーズは高まっている。本研究で実施しているシンポジウムは、キャリアデザイン学に関心を持つ方が参加することができ、専門的に考える機会を提供している。また、教員が務めている各種学外委員では、それぞれの専門性を活かして各現場で助言を行なっている。そうした取り組みが主要メディアで記事化されることも多く、社会貢献は十分なものと言える。
改善のための提言	それぞれの活動での専門的な知識提供は、高く評価に値する。今後は、キャリアデザイン学研究科全体として集積的な知識の社会還元が求められる。その点、シンポジウムの開催と実施テーマは重要な意味を持つ。個別テーマに柔軟に対応する教育支援体制を維持しながら、本研究科独自の専門性の強みをより集中的に蓄積して社会に還元していく。具体的には、キャリア教育・発達プログラム、ビジネスプログラム、それぞれの領域でいくつかの個別研究テーマを深化させ相互連携させていくことで、キャリアデザイン学ならではの協働的かつ実践的なさらなる社会貢献が可能となるであろう。	
<p>【重点目標】 学生の受け入れに関する年度目標を最も重視する。これまで、質を厳しく担保しつつも定員充足率を適正に管理してきており、こうした充足率管理を継続していく。その目標を達成するために、これまで通り、ホームページ、パンフレット、入学相談会、大学院シンポジウムなど、あらゆるチャンネルを用いて入学志願者に詳しい入試情報を提供していく。2016年度から始めた、研究計画書に関する説明会も継続し、志願者の入学後の研究に関する質問に対し、具体的な対応を行う。従来通り、入学者の選抜には全教員が携わり、入試結果の詳しい分析を行い、志願者とその傾向や課題を全員で共有し、入学者選抜に関する検証をその都度行うこととする。</p>		
<p>【年度目標達成状況総括】 年度目標として掲げた諸項目はほぼ達成され、とりわけ最も重視する年度目標、すなわち、学生の受け入れに関する年度目標は、定員充足率100%を回復するなど、顕著な質の向上が見られた。それらの年度目標を実現できた背景には、年2回の質保証委員会、さらには毎月の定例教授会において、機会あるごとに質保証に関する話し合いや点検を実施し、積極的な意見交換や問題提起を行い、検証を行っていることがあると考えられる。小規模な研究科という特性を生かし、質保証をめぐる教員全員参加型の掘り下げた意見交換の機会を随時持つように務めていることが功を奏したものと思われ、今後ともこのような取り組みを継続的に行っていきたいと考えている。</p>		

IV 2019年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	プログラム制による体系的なカリキュラムを通じた専門性深化の継続と浸透。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	年度目標	カリキュラム全体（基礎・共通科目、プログラム科目、演習）の運用状況の把握、問題の発見と解決に加え、eLCoreを活用した研究倫理教育を徹底する。
	達成指標	現状では授業アンケート等で深刻な苦情・問題点は見られないが、今年度も引き続き、アンケート等によりカリキュラムの運用状況の把握、問題の発見を行う。研究倫理教育に関しては、次年度に演習を履修する修士1年生 eLCore 修了率 100%を目標とする。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
2	中期目標	研究科開設から5年という節目において、より一層の教育研究指導方法の向上を図る。
	年度目標	前年度に引き続き、シラバス通りの授業実施の徹底と、マンツーマンでの修士論文指導体制および年3回の修論発表会を実施し、対処すべき課題が生じた際には迅速かつ適切に対応する。
	達成指標	大学院生の研究計画に基づいて修士論文指導教員を適切に配置し、ミスマッチのないマンツーマン指導体制を確立する。授業上で対処すべき課題は授業アンケート等で把握し、適宜、研究科内での情報共有と対応を行う。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
3	中期目標	修了生の学会発表、学会誌への投稿等の継続的促進を図る。 研究科修了生のレベルの維持・向上を図り、高度職業人養成機関としての本研究科の社会的地位の継続的な向上を図る。
	年度目標	大学院生の学習状況を把握し、十分な学習成果を出せるよう支援する。また、修了生のうち優れた研究を行った者については学会での研究発表、学会誌への論文投稿等の促進を継続するとともに、修了生の研究成果の実務界への還元も推奨、促進する。
	達成指標	年3回の修士論文検討会等において、研究の進捗状況の把握と助言を行い、研究水準を理由とする修了試験不合格者の発生を防ぐ。また、学会発表、論文発表その他研究成果の社会還元の実績に関する情報を研究科内で共有し、Web サイト、シンポジウム等で広く公表する。
No	評価基準	学生の受け入れ
4	中期目標	学生募集はホームページ、パンフレット、入学相談会、大学院シンポジウム、研究計画書説明会など、あらゆる機会を通して入学志願者に詳しい入試情報を提供してきており、このような取り組みをいっそう充実させる。
	年度目標	定員の充足率に関しては、過去5年間平均で90%以上を継続しており、2019年は100%を達成した。従来より、合格基準点を下げることなく質を厳しく担保しつつも定員充足率を適正に管理してきており、こうした充足率管理を継続していく。
	達成指標	引き続き100%の定員充足率を目標とするが、合格基準点を安易に下げることなく、書類選考、筆記試験、口述試験による研究遂行能力の評価に基づいて厳格に入学者を選抜し、質の高い教育の確保・徹底に努める。
No	評価基準	教員・教員組織
5	中期目標	当研究科では2011年に大学院担当教員の基準を明確化し規定を整備している。規定に基づき適切に教員募集・任免・昇格を行うことを継続していく。
	年度目標	定年退職者の補充、学部科目担当との調整に対応した教員配置は2018年度に完了している。本年度は教員組織の質的向上を目標とし、各教員の、法政大学キャリアデザイン学会等における相互研鑽と、各種学会への参加、論文発表を通じた自己研鑽と成果発現に努める。
	達成指標	教員配置に関する課題を継続的にモニタリングし、必要に応じて対応を行う。教員の研究成果に関しては、質の確保という点から単純な数値目標を追求することは適切でないが、本研究科のカリキュラムに関連する幅広い観点からの研究を奨励し、状況のモニタリングとして、各教員の研究実績に関する情報を共有する。
No	評価基準	学生支援
6	中期目標	社会人院生が実務と研究のバランスをとっていく上でのアドバイスや、修士レベルの論文を書くのが初めての院生に対する、学術的調査研究の取り組み方・心構えの指導など、全教員がいっそうきめ細やかな対応を行っていく。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	年度目標	今年度より長期履修制度利用者が第2年次に入ることを受け、修士論文指導を履修していない2年次以降の大学院生に対し、学習の継続状況を把握し、修士論文指導までの学習方法等に関して必要十分なフォロー体制を構築する。
	達成指標	従来より各学年から代表者・連絡係を選出して各種の連絡を行ってきたが、長期履修中の院生（演習を履修していない2年次以降の院生）からも同様に担当者を選出し、定期的な状況把握や学習機会の提供を行う。また、この体制をルーティン化できるよう、課題の把握も行う。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
7	中期目標	キャリアデザイン学は理論に裏付けられた実学であり、高度な専門職を目指す院生の学習ニーズに応えるのと同時に、社会の人材ニーズにも対応していくことに力点を置く。
	年度目標	大学院修了者および教員の研究成果を学会、学術雑誌にて発信し、キャリアデザイン学の知見を広く社会に提供する。また、大学院修了者による、研究成果の実践への還元も推奨していく。
	達成指標	大学院修了者および教員により、研究成果を学会や学術雑誌で発表するのみならず、研究実績および実践への応用実績をウェブサイトやシンポジウム等で広報し、研究成果の社会還元・普及を促進する。
<p>【重点目標】</p> <p>目標：学生支援</p> <p>今年度より長期履修制度利用者が第2年次に入ることを受け、修士論文指導を履修していない2年次以降の大学院生に対し、学習の継続状況を把握し、修士論文指導までの学習方法等に関して必要十分なフォロー体制を構築する。</p> <p>施策：各学年および長期履修中の院生のそれぞれから代表者・連絡係を選出し、メーリングリストを作成して各種の連絡を行う。各種行事等の連絡事項を伝達するのみならず、定期的に状況把握や学習機会の提供のための連絡を行い、必要に応じて対策の考案、サポートの提供を行う。また、長期履修者の学習等に対処すべき問題が生じた際には速やかに教授会にて検討する。</p>		

V 大学評価報告書

2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価	
<p>様々な組織体における人事・教育・キャリア支援担当者やキャリアコンサルタントとしてより高度な専門性を目指す人材を育てることを大きな目標とするキャリアデザイン学研究科では、「キャリア教育・発達プログラム」、「ビジネスキャリアプログラム」の2つの教育プログラムに「プログラム共通」を加えた3つのカテゴリにバランスよく教員が配置され、教員の欠員補充状況も良好であり、カリキュラム内容の充実は学生からのアンケート結果からも見て取れる。修士論文に関わる研究・執筆の指導について、日常の個別指導とともに年3回の集団指導（構想発表会2回、中間発表会1回）を実施しており、きめ細かく行っている。キャリアデザイン学部との連携も組織的に図られている。キャリアデザイン学研究科は夜間・土曜日開講であることから、キャリアデザイン学部の卒業生が、同研究科の教育理念に即して社会人院生として戻ってくるという好ましい現象が起きており、今後も注目されることである。定員の充足については、2019年4月の入学者では100%を達成した。今後も留学生も含めた学生募集のよりよい方策が講じられることを期待したい。</p>	
1 教育課程・学習成果の評価	
①教育課程・教育内容に関すること	
<p>キャリアデザイン学研究科の教育理念、育てる人材像に即して設置された2つの教育プログラム「キャリア教育・発達プログラム」「ビジネスキャリアプログラム」において、学生はそれぞれコースワーク基礎科目・共通科目で素養を深め、興味の深まったテーマに対してリサーチワークへ展開し、それらを通じて学んだ成果を修士論文の執筆・発表に結実させるという、体系的な教育プロセスとなっている。各教員の最新の研究成果が担当科目の教育内容に摂取され、修士論文の研究テーマにも反映されるなど、専門分野の高度化に対応している。一方、グローバル化の推進に関しては、キャリアデザイン学の国際比較の研究等も見受けられ、地道な姿勢が現れているが、質の高い留学生を受け入れるための方策も引き続き検討されたい。</p>	
②教育方法に関すること	
<p>キャリアデザイン学研究科の履修指導については、年度初めに新入生向けに全教員が授業内容を具体的に説明する機会（新入生オリエンテーション）を設け、同時に研究指導計画を書面にて配布しており、適切な運営と言える。また、学生</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

にとって最も重要な関心事である修士論文の取り組み方やスケジュールなども口頭説明の形式で学生への周知が図られている。これらの履修指導・研究指導は、各教員の個別指導において、より詳細に実施されていることも窺える。研究指導、修士論文執筆指導については、担当教員によるものはもとより、年間 3 回の発表会を研究科全体行事として実施している点も、高く評価できる。

③学習成果・教育改善に関すること

キャリアデザイン学研究科における修士論文以外の科目の成績評価については、各教員の責任において行われている。一方、修士論文については、主査 1 名、副査 2 名の体制で審査され、口述試験については公表されているディプロマポリシーにも即した学位授与基準により、厳格な評価を行っている。なお、学位審査の方法・基準は新入生オリエンテーションの配布資料に含まれ、早い段階で学生に周知されている。学位の授与状況の把握についても実行されているが、長期履修制度の導入に対応した情報管理と更新作業等の工夫が今後は必要と見られる。学位の水準の維持については、研究科全体行事として行われている発表会が機能していると推察される。学位授与の責任体制についても明確である。

キャリアデザイン学研究科の在学学生は現職を有する社会人であるため、修了後の進路については基本的に把握できるものである。学習成果の把握・評価とそれらの方法については、学生に他者（研究者・同輩・後輩）の前での研究発表を修了までに複数回させるという体制等によって実行されている。教育課程や関連諸方策の改善等に関するフィードバック体制（アンケート含む）に関しては、質保証委員会や大学院教授会等を通じて意見交換がなされている。

2 教員・教員組織の評価

法政大学キャリアデザイン学会を通じた行事を FD 活動にリンクさせる取り組みは、他大学の教員・研究者からもたらされる情報等をお互いに活用できるという観点から、良策であり評価できる。一方、キャリアデザイン学研究科の母体となっているキャリアデザイン学部における海外実習系科目の綿密な実施や、本研究科が夜間・土曜開講であることなどから、教員の業務負担は多いものと推察される。このような環境において、研究活動・社会貢献活動をさらに活性化させるためには、自己点検・評価シートに記されている通り、まずは教員の業務配分を検討することが必須と思われる。この点に関する今後の取り組みに期待したい。

2018 年度目標の達成状況に関する所見

キャリアデザイン学研究科の重点目標に挙げられた学生の受け入れに関する事項について、2018 年度の取り組みによって改善が見られたことは、高く評価できる。教員間の意見交換に基づく分析や具体的な方策により、志願者母集団の傾向の把握や、実際に入学してくる学生が何を望んでいるのか等について、研究科としての情報共有がなされたものと推察される。今後も情報の収集・整理・分析等に留意しながら、いわゆる入り口問題に適切に対応していくことを期待する。

2019 年度中期・年度目標に関する所見

キャリアデザイン学研究科の各評価基準に対する年度目標は、中期目標に即したもので、適切かつ具体的と言える。達成指標についても、eLCore 修了率 100%の達成や定員充足率 100%の維持、修了試験不合格者ゼロ等、具体的な目標が挙げられている点は評価できる。重点目標としては、長期履修制度利用者が 2019 年度に 2 年次になることを受けて、修士論文指導に至るまでの期間の学習に対するケアとフォロー体制の構築を挙げているが、この重点目標を達成するための施策も適切かつ具体的であり、実効性が見込める。また、問題が生じた場合は、一部の教員任せにするのではなく、教授会全体として速やかに対処するという点も、適切である。

法令要件及びその他基礎的要件等の遵守状況

特になし

総評

教育システムとして捉えると、1 学科学部であるキャリアデザイン学部の advanced course に対応するキャリアデザイン学研究科（1 専攻）の強みとして、教員間の意見交換や意識確認、諸施策の策定などが行いやすい、つまり機動性のある運用をしやすい学部・研究科と言える。自己点検・評価の各書類からは、その強みを生かした真摯な取り組みの様子が窺える。一方、キャリアデザイン学に関する高度な知識と実践・展開能力を備えた人材を輩出すべく研究教育活動を行っている当研究科が、質を落とさず入学者定員を確保し続けるためには、自らの教育目標の社会的な立ち位置・強み等を外部にアピールし続けることが重要と思われる。これについては、法政大学キャリアデザイン学会が有効に機能しており、今後もそういった強みが生かされ、2019 年度に回復した定員充足率 100%が今後も維持されることを期待する。また、長期履修制度の導入によって、今後の修了生の満足度がどのように変化するかについては、注目されることである。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。